

< 来週の聖書から >

【**ダビデの子**】来週の聖書の14:37までの箇所には前提があります、12:34に“それから後は、イエスにあえて問う者はなかった”とあります。詩編110編に“主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と”が問題の聖書箇所です。イエス様は“キリストはダビデ王以上のものである”ことを語られました。多くのユダヤ人たちは“ダビデの子孫であるからダビデ以上のものではない”と理解しました。“群衆が耳を喜んで傾けた(37)”とあるのは、おそらく宗教上の指導者たち律法学者がイエス様に論破されることを期待したのでしょう。

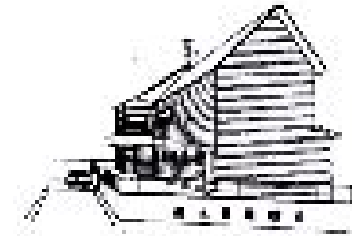
【**指導者のおごり**】これにつづく38~40は、今の時代に当てはめても良く分かります。創造の神の権威は“人々が豊かに暮らすこと”だったはずだったのに、自らの権威であるかのように、悪用してしまっていました。“やもめ”は貧しい人々のことを云っています。先週の礼拝で“ぶどう畑の喩”を開きましたが、元々はゆだねられたものなのに、自分のもののようにしてしまいます。更に大きく、更に優秀に、どんな方法を使おうとも、成功しようと願う心は、良し悪しにつけ、私たちの前にあります。教会学校で“ナルニア国物語”の最初の映画を見たことがあります。 “氷の女王”が描き出している世界のテーマもこれです。私には名誉も権威もある。“失いたくない”と願ったり、あるいはうらやましく思うものです。

【**やもめの上に立って**】40節から、律法学者といわれている指導者たちへの痛烈な批判が記されています。裕福なものから奪うのではなく、力のない“やもめ”の家を、律法学者たちは“食い倒す(40)”というのです。そして宮の“さいせん箱”に多額の金銭を、誇りをもって投げ入れるのです(41)。主の世界はこのような寂しい世界からの解放でもあります。

【**レプタ2枚**】ところが敬虔な、貧しいやもめが、全てをなげうって、感謝して小額のさいせんを宮に捧げている光景に進みます(42)。1レプタは、当時の一日の労賃の1/28分の1に当たる最小の単位です。私たちの想像は“明日からどう生活するの”ということに当然向くのです。その婦人には、神への信頼の故に、そのような思いはなかったと主は仰っているのです。それに反して、“名誉のためにどれ位なら献金できるか”と金持ちたちは計算したというのです。どちらが神の高い評価を得ることになったか、ということです。バルナバは捧げることによって豊かになりました。信仰者の群れが生活の基盤になったのです。仕事が祝福されることを祈りましょう。多くを得、蓄え、可能な限り多くを捧げましょう。献金を多くしすぎたことによって貧しくなった、という例を私たちは知りません。私たちの献金袋には“十一献金”ではなく、残念ながら、“十一献金の精神”とあります。これは十分の一の必要はない、という意味ではありません。

週報

2010年 8月 29日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

振替口座 00890-6-214042